



## 城

いぬやま  
第四十八回 犬山城  
～尾張藩付家老、成瀬家の城～

深草 祐一

今回は、国宝の天守で知られる犬山城を取り上げます。白帝城との異名を持つ犬山城の天守は、現存する12の天守の一つであり、近年まで個人所有だったことでも有名です。明治以降、全国の城(特に建築物)が破却されていく中で、現在まで残った犬山城について、今回は歴史を遡りながらご紹介したいと思います。

### 木造のまま現存する天守

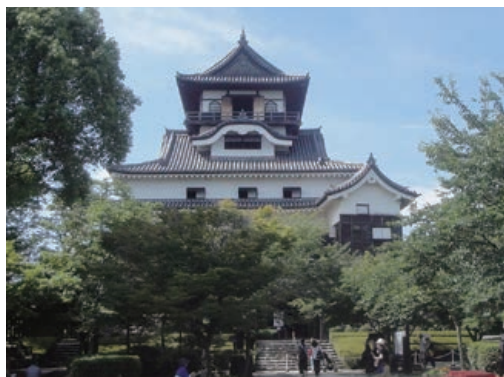
犬山城の天守は、外観三層・内部六階、入母屋造の大屋根の上に望楼がのせられた形をした望楼型といわれる比較的古い形式の天守です。望楼には火灯窓と廻縁を配し、東西の入母屋破風に加えて南北には唐破風も備えた優美な外観を有する一方、入り口脇には付櫓が横矢を効かせ、北西隅と北東隅に設けられた石落としが敵の接近を阻むという実戦的な顔も見せています。城の縄張りとしても、北側を流れる木曾川に面した断崖上の最高点に天守が建ち、その南に本丸、杉の丸、椀の丸、桐の丸、松の丸、そして三の丸と段々に郭を配置した、典型的な「後ろ堅固の城」であり、石垣で固めた郭配置も見応えがあります。

この貴重な城が現在に保存されたのは、江戸時代を通じて犬山城の城主であった成瀬家の尽力があったか



川鶺が舞う木曾川の対岸から見た犬山城

らでした。明治の版籍奉還、廃藩置県により、犬山城も例に漏れず城主の手から離れることとなり、城は県の所有となります。そして、明治6年の廃城令により天守以外のほとんどの建物は取り壊されました。しかし、残った天守も明治24年の濃尾大地震で半壊。震災復興で手一杯の県に財政的な余裕はなく、議会は天守の取り壊しを決定しようとしていました。その時、かつての城主成瀬正肥氏が県と掛け合い、城の修復をすることを条件に所有権を譲渡されました。以後、犬山城は全国でも珍しい個人所有の城として管理されていくことになったのです。犬山城は、昭和34年の伊勢湾台風でも大きな被害を受けましたが、それを契機に大がかりな解体修理が行われて再び蘇りました。ただ、地元の方々の支援があったとはいえ、時代が移り変わる中、一人で城郭を維持していくのは容易なことではなかったでしょう。そして、2004年、成瀬家直系の子孫となる女性の決断によって財団法人犬山城白帝文庫が設立されることとなり、以後、城の運営は当該財団によって行われています。財団の初代理事長となった成瀬さんは、地元の方からは姫と呼ばれることもあるそうですが、あるTV番組のインタビューで、成瀬家は、江戸時代は尾張徳川家に仕えたが、明治以降は犬山城



犬山城天守

に仕えたような感じがするという旨、語っておられました。成瀬家代々の犬山城への想いが伝わってきます。

## 犬山城主となった成瀬正成<sup>まさなり</sup>

さて、成瀬家は犬山城の城主であったと書きましたが、実は大名ではありません。禄高は3万5千石であったということですが、徳川御三家の一つ尾張徳川家を補佐・監視するために幕府から派遣された付家老<sup>つけがろう</sup>という立場でした。犬山城と成瀬家との関係は、家康の小姓から出世した成瀬正成が尾張徳川家の設置にあたり付家老<sup>つけがろう</sup>に任命されて犬山城に入ったことに始まります。

成瀬家に伝わる長篠合戦図屏風には、成瀬正成<sup>まさなり</sup>の父、正一<sup>まさかず</sup>が徳川軍の馬防柵の前で武田軍に向かって立つ姿が画かれています。成瀬正一<sup>まさかず</sup>は、武田の家臣だった時期があり、武田の内情をよく知っていたため、攻め掛かる武田騎馬軍団の中の有力武將を指し示し、鉄砲の集中射撃によって討ち取るのに大きな貢献をしたと言ひ伝えられているそうです。その息子の正成<sup>まさなり</sup>は家康の小姓として側近く仕え、やがて徳川軍の一員として初陣を迎えます。それは、小牧・長久手の戦いであったといい、犬山城が重要な戦略拠点の一つとなった戦いでした。後付けですが、成瀬家と犬山城の因縁を感じてしまいます。

## 小牧・長久手の戦い

織田信長亡き後、羽柴秀吉は信長の直系の孫を擁立することで織田家中の主導権を握り、実質的に織田軍団を継承していきました。それに反発した信長の三男織田信孝<sup>のぶたか</sup>は切腹させられ、やがて危機感を抱いた次男織田信雄<sup>のぶかつ</sup>も秀吉と対立。徳川家康に支援を求め、両者は清洲城で軍議を開きました。ちょうどその時、どちらに付くか迷っていた大垣城主の池田恒興<sup>つねおき</sup>が秀吉に付くことを決断し、城主が出陣して空になっていた織田信雄<sup>のぶかつ</sup>方の犬山城を急襲、占拠しました。この急報に接した家康は、主戦場は尾張北部になると判断。清洲城と犬山城の中間に位置する小牧山が重要とみて、先制占拠させました。こうした連絡を受けた秀吉は、可能な限りの軍勢を率いて犬山城へ入ります。そして、家康、信雄<sup>のぶかつ</sup>も小牧山へ進出しました。それぞれの陣営が尾張の戦場へ投入した兵力は、諸説あるものの羽柴軍8～10万、徳川・織田連合軍2～3万程度であったといい、総兵力的には羽柴軍が圧倒していました。しかし、精鋭ぞろいの徳川軍が旧小牧山城跡の周囲に二重

の土塁を構築するなどして堅守している状況をみて、秀吉は、小牧山の北方に多数の砦とそれらを結ぶ長大な土塁を築かせて軍勢を配置します。そして、局地的に小競り合いは起こったものの、両軍にらみ合ったまま膠着状態となりました。

小牧・長久手の戦いのクライマックスはこの後の両軍の動きになるのですが、それはいずれ別稿でご紹介したいと思います。結局、長久手での戦闘で徳川軍が大勝利を収めた後、再び戦線は膠着状態となり、野戦で家康を屈服させることは難しいとみた秀吉は、もっぱら織田信雄<sup>のぶかつ</sup>の所領である伊勢の諸城攻略に力を注ぎ、織田信雄<sup>のぶかつ</sup>と単独講和へ持ち込んで家康の戦う理由を失わせ、軍を引かせました。最終的に、徳川家康は大坂城に向いて豊臣秀吉の下に入るしかなくなりましたので、政治的に秀吉が勝利を収めたといえます。しかし、家康は、少なくとも戦<sup>いくさ</sup>では負けなかったことで、豊臣政権下で一目置かれる地位を獲得したのです。徳川家康が後に天下を獲得の基盤をつくったともいえる小牧・長久手の戦いで初陣した成瀬正成<sup>まさなり</sup>。彼はその後の戦でも手柄を立てて出世し、かつて初陣の折、敵方の総大將が本陣を置いた犬山城の城主になったのです。

## 犬山城の築城と改修

さて、犬山城のはじまりについては、かつて応仁の乱の時期に築かれた砦があった位置に、織田信康（信長の叔父）が天文6年（1537年）に築城して居城を移したのが最初であるという説が有力なようです。その後、小田原征伐で功があつて犬山城を与えられた石川貞清が美濃金山城から櫓を移築した、という伝承がありましたが、昭和の解体修理の際には移築の痕跡は認められなかったといい、現存する犬山城天守の建築時期は織田信康時代まで遡るのではないかとされています。そして、元和3年（1617年）に犬山城に入った成瀬正成<sup>まさなり</sup>が当時二層だった天守に三層目の望楼<sup>ぼうろう</sup>を増築して今に残る優美な天守に造り変えたと伝わります。成瀬正成<sup>まさなり</sup>が犬山城を拝領してから今年でちょうど400年。現在に生きる私たちが桃山時代の様式による木造のままの天守を見ることができる、その背景を思うとき、歴史の面白さを感じずにはられません。

※本原稿入稿直前、7月12日の雷雨により、犬山城の鯨が破損したというニュースが流れました。一日も早く修復されることを祈ります。